

# 国外宣教

2011年6月号 No.412

編集発行／日本同盟基督教団 国外宣教委員会

この御国の福音は全世界に宣べ伝えられて、すべての国民にあかされ、それから、終わりの日が来ます。マタイ24：14

## 「何としても」の国外宣教



元・国外宣教委員長

よしもち あきら  
吉持 章

神は75歳のアブラムに「あなたの生まれ故郷、あなたの父の家を出て、私が示す地へ行け」と命じられました。私も、後期高齢者の仲間入りを機に、新しい旅立ちで荷造りにかかると、押入れの奥から「宣教師の手紙類」と書かれた古いダンボール箱が出てきました。それを見て急に1964年来の国外宣教の古い記憶がよみがえってきました。その頃の地球は今の何倍も大きく、台湾、インドネシア、カナダのイヌイット地区、タイ等への手紙はその返事が届くまでには3〜4週間もかかりました。インターネットで瞬時に世界の何処にでも届く昨今とは大違いでした。

そんなわけで宣教師たちは祖国の情報や他のフィールドで働く同労者たちの情報に飢えていました。そこで薄紙の航空便箋に何枚ものカーボン紙を挟み「悪口広場」なる手紙誌を作り、それを各宣教師に送りました。まだコピー機など普及していない時代です。その内容は各宣教師から寄せられる失敗談や、ユーモア溢れる異文化体験、そして彼らが抱えている心配や課題の配信でした。するとそれを読み「ああ、あの宣教師も自分と同じ問題で悩んでいる、悩んでいるのは自分だけではない」と気づき、一人の失敗談は他の同労者への大きな励ましとなったようです。宣教の促進は、何と言っても働き人の活性化です。どんなに物

や、組織や、体制が充実しても、先端に立つ宣教師と、その働きを支える人々との間に血の通った人格的ぬくもりが感じられなければ、先端で働く者はとても捨て身で働くことなどできません。また支える側にしても、前線の宣教師に必死が見えなければ、祈りも、献金も、必死の見える他の働きへと流れて行きま

す。2千年前の五旬節に、みな一つ所に集まっていたとき、そこに「突然天からの激しい風の割り込みがあり、響きが起こり、家全体に響き渡った。」と広がりが見えます。昨今は突然の東日本大震災、地震、津波、火災に加えて、人の制御の及ばない野獣のよゆうな「原発事故」の思わぬ割り込みで、天を恐れぬバベル文明のあやうさが露呈しました。地域住民の方々には大迷惑な割り込みです。しかし人とは悲しいことに、ここまで追い詰められなければ人間の思いつきに気付けない誠心鈍い存在です。他人ごとでは

ありません。理路整然の機構改革も、組織の整備も大いに結構、だがその間に教団の明日を担う働き人の種蒔きはどくなっていたか。今年の同盟献身者の激減振り(※)には大ショック「レベル7」の最悪状況ではないだろうか。

神よ、今、同盟に一つ心の熱い祈りを起こし、天よりの激しい風を吹き込んでください。悲嘆に暮れる被災地に希望を伝える炎の舌を遣わし、全地に「イエスは主なり」の歡喜の叫びを響かせてください。助け主なる聖霊よ、宣教の最前線に立つ宣教師たちをあなたの御力で満たしてください。同盟教団を宣教へのたぎる思いで満たし、しっかりと献げ、支える群れとなし「何となく」の惰性宣教ではなく「何としても」の燃える宣教師とさせてください。アーメン。  
(館山教会牧師)

※2011年、同盟基督教団からの神学校入学者は計6名(その内T.C.U.入学者1名)昨年15名、一昨年21名(参照・「世の光」2011年5月号)  
(国外宣教委員会)